

高知大学考古学調査研究報告第4冊

大元神社古墳発掘調査報告書

2007年3月

高知大学人文学部考古学研究室

大元神社古墳発掘調査報告書

2007年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例 言

- 1 本書は高知県香美市土佐山田町楠目に所在する大元神社古墳の発掘調査報告である。
- 2 本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。調査は、清家章（人文学部助教授）が担当した。
- 3 本調査の実施ならびに本書の発行については日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」の一部を使用した。
- 4 調査期間は2006年8月16日から9月7日である。
- 5 写真の撮影は清家と桥家が主として担当した。
- 6 挿図のうち、図1～3の方位は真北を示し、図8～10・12・14の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 7 図3は国土地理院発行の5万分の1地形図を利用して作成した。
- 8 調査には高知大学大学院人文社会研究科大学院生・人文学部考古学ゼミ生ならびに人文学部人間文化学科1～2年生が参加した。
参加者は以下の通りである。桥家豊（高知大学大学院）・大森麻衣子・鈴江祐・鈴木善也・中井紀子・矢部俊一・渡辺可奈子・岡林加枝・岡本治代・佐伯麗・白川聰子・馬場省吾・堀内淳矢・吉川裕子・江本菜穂・加藤逸美・永元智宣・末永知美・高橋麻衣・柄木史子・新田まみ・山崎香菜恵・渡辺早苗（以上、高知大学学生）。
- 9 調査の実施にあたり、池英樹・甲藤栄一・黒岩崇・名本二六雄・野町貴弘・廣田佳久・藤岡敬一郎・森田尚宏・山本哲也・横部落の皆様・大元神社・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・香美市教育委員会・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・前行部落の皆様・八王子宮（個人・団体の順。五十音順。）より、多大なご協力をいただいた。
- 10 本書の執筆は、清家・桥家が担当した。分担は文末に示した。
- 11 本書の編集は清家が担当した。

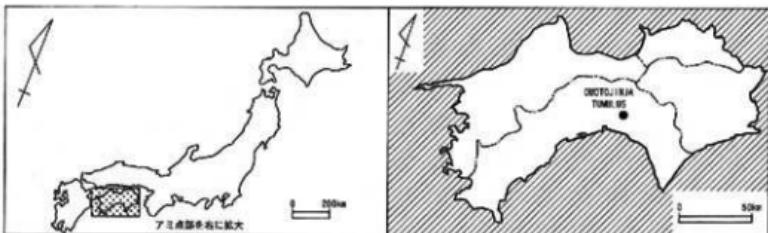


図1 大元神社古墳の位置

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 大元神社古墳の立地と周辺の古墳	3
3 調査の経緯と経過	4
第Ⅱ章 調査成果	7
1 墳丘の現状と調査区の設定	7
2 墳丘の調査	7
第Ⅲ章 まとめ	15

図版目次

図版	図版
1 1 古墳の立地	4 1 3トレンチ（西から）
2 古墳中央部	2 2トレンチの溝（西から）
2 1 1トレンチ（東から）	3 3トレンチの溝（北から）
2 1 トレンチ（西から）	5 1 崖面調査区西セクション
3 1 2トレンチ（北から）	2 崖面調査区東セクション
2 2トレンチ（南から）	

挿図目次

図1 大元神社古墳の位置（鈴江製図）	iii
図2 大元神社古墳の立地（大森・清家製図）	1
図3 周辺の主な古墳（清家製図）	2
図4 作業風景	4
図5 前行山1号墳	4
図6 前行山5号墳	4
図7 調査中の1コマ	4
図8 調査区配置図（馬場製図）	8
図9 1トレンチ平面図・土層断面図（白川製図）	9
図10 2トレンチ平面図・土層断面図（吉川製図）	10
図11 3トレンチSK1検出状況	11
図12 3トレンチ平面図・土層断面図（佐伯製図）	11
図13 崖面調査区土層図（堀内製図）	13
図14 墳丘復元図（清家製図）	15

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

大元神社古墳は香美市土佐山田町楠目に所在する。香美市土佐山田町は南国市及び高知市から見て北東方向にあたり、現在においても香川県・徳島県方面に向かう上での重要な交通ルートとなっている。現在の土佐山田町の中心街は高知平野北東部、物部川によって形成された河岸段丘上に位置し、大元神社古墳はこのような河岸段丘の北に広がる四国山地系の山々の麓付近に位置している。

土佐には、古墳時代前半期に属する古墳は極めて少なく、また明確な前方後円墳も未だ確認されていない。前半期にさかのぼる可能性を持つ古墳は、幡多地域には宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曾我山古墳群、高知平野には、南国市長歟2号墳と南国市狹間古墳などがわずかにあるのみであり、よって、土佐の古墳のほとんどは横穴式石室を内包する後期古墳である。

高知平野においては南国市を中心とする高知平野東部地域に主に古墳が分布する（図3）。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳は南国市に所在する長歟4号墳であり、

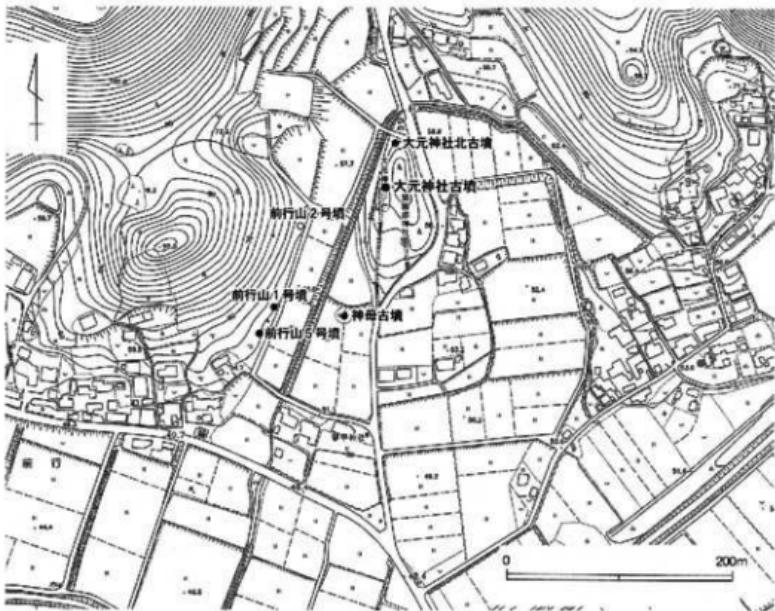


図2 大元神社古墳の立地

2 周辺の遺跡

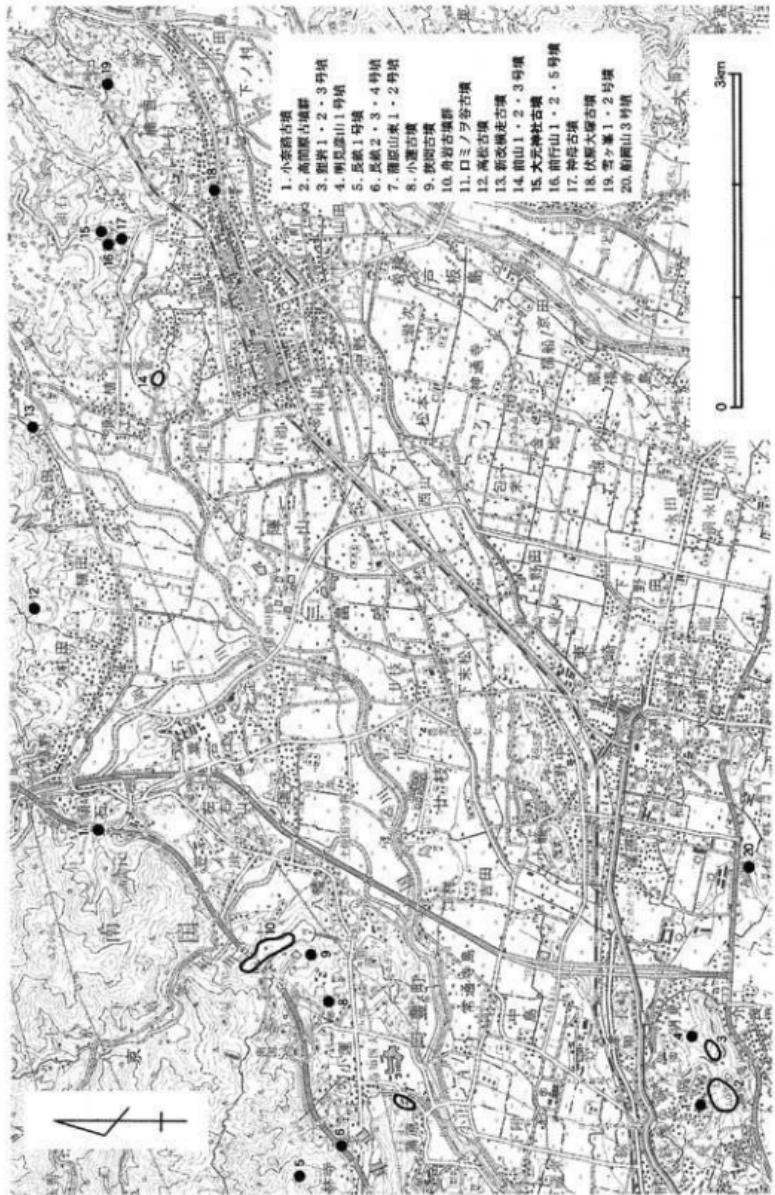


図3 周辺の主な古墳

TK10型式期の須恵器を出土している。その後、南国市には蒲原山古墳群、高知市には高間原古墳群などが続いて造営され、土佐山田町では県内で唯一埴輪を持つ伏原大塚古墳が築造されたと考えられる。

その後、TK43型式期からTK209型式期にかけて高知平野の北東部に広がる丘陵上に多くの横穴式石室墳がつくられる。南国市においては高知県最大規模の古墳群である舟岩古墳群や、土佐三大石室のひとつである小蓮古墳などがその代表として挙げられるが、この時期には土佐山田町においても大規模な横穴式石室と金銅装の馬具などをもつ新改横走古墳をはじめとして上改田古墳、前行山古墳群など、比較的多くの横穴式石室墳が造営される。

今回調査した大元神社古墳は、過去には調査が行われておらず、遺物なども発見されていないが、墳丘の規模や石室に使用された石材などから高知平野における後期古墳築造の流れから大きく外れることはないものと考えられ、未調査の古墳が多い土佐山田町の古墳の様相を探る上で重要であると考えられる。

(挿家)

2 大元神社古墳の立地と周辺の古墳

大元神社古墳の立地 大元神社古墳は、土佐山田ゴルフクラブが存する丘陵のさらに南にある丘陵上に存在する（図2）。土佐山田ゴルフクラブのある丘陵から南西と南東方向に尾根が伸びており、その中央部分は扇状地形を呈している。その扇状地形の付け根部分に、古墳のある丘陵は位置している。古墳のある丘陵の西側の麓には流路が走り、東側は丘陵の裾部を道路が走って東側にある集落と画している。古墳のある丘陵は、周囲は水田に囲まれて独立丘陵状に現状では見えているが、もともと北西の丘陵から派生した尾根であった可能性もある。大元神社古墳は、この丘陵の最高所よりもやや西に偏した大元神社社殿の北側に存在する。

大元神社古墳周辺の古墳 大元神社古墳は単独で存在するのではない。大元神社北古墳・神母古墳・前行山1号墳・前行山2号墳・前行桜ヶ谷1号墳・前行桜ヶ谷2号墳が周囲にある。

大元神社古墳は前行山古墳群の中に含まれ、大元神社古墳それ自体も前行山3号墳と呼ばれていた（廣田1979）。前行山古墳群はこれまでに5基の古墳が知られていたが、大元神社古墳と大元神社北古墳以外の各古墳の位置を示した正確な図がなく、前行山古墳群の分布状態は不明な点が多かった。

2006年3月、大元神社古墳測量調査の報告書（高知大学編2006）を制作中、前行山古墳群の分布図を作成する必要に迫られ、筆者は山本哲也氏（高知県文化財団埋蔵文化財センター）とともに前行を訪れ、簡単な分布調査を行った。その踏査時に、大元神社古墳の西側にある前行山の山裾に前行山1号墳の墳丘と横穴式石室（図5）を確認し、さらにその南側約50mの地点に古墳と思われる長さ15m程度の高まりを認めたのである（図6）。

この高まりは明らかに古墳と考えられ、周囲は幅1～2mの溝で囲まれている。墳丘の中心



図4 作業風景



図5 前行山 1号墳



図6 前行山 5号墳



図7 調査中の1コマ

部分は大きく削られている。大元神社古墳と同じように石室の石取りが行われたのであろうか。筆者らは、これこそが前行山2号墳であろうとして、前行山古墳群の古墳分布図を作成した（高知大学編2006の図2）。

しかしながら、その一方で高知県の遺跡台帳⁽¹⁾には「1号古墳の西側約100mの雜木林にあったらしいが、踏査では確認できず」との記録がある。遺跡カードに添付された地図には1号墳北側に2号墳のマークが落とされている。この遺跡カードにある2号墳の位置と筆者らが確認した古墳の位置は方角も距離も相違している。測量調査報告書作成後、遺跡カードにある内容は信頼できる情報であるとの指摘を香美市の中山泰弘氏からいただいた。また、筆者らが2号墳とした古墳は新規発見の古墳であろうとのご教示もいただいた。

『土佐山田町史』（廣田1979）にも2号墳は「墳丘・石室とも取り除かれ」と記載され、筆者らが確認した古墳は墳丘が遺存していたので2号墳ではない可能性が高い。2006年3月の踏査時には新規の古墳を発見していたわけである。

つまるところ前行山古墳群は、前行山1号墳・2号墳（消滅？）・大元神社古墳（3号墳）・大元神社北古墳（4号墳）・神母古墳と新規発見の古墳から構成されていることになる。新規発見の古墳を5号墳（図6）と呼ぶことにしよう。このような検討を経て新たな古墳分布図を作成した（図2）。 （清家）

3 調査の経緯と経過

調査の経緯 高知大学考古学研究室では、2004

年より高知の後期古墳を継続して調査を行ってきた。大元神社古墳もその一つで2005年7~8月に測量調査を行い、その成果を2006年3月に報告したところであった（高知大学編2006）。また、研究室代表の清家は、本年度より科学研究費「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」の交付を受け、後期古墳の墳丘・石室・副葬品などから南四国を中心とした交流について調査と研究を進めることになったのである。

大元神社古墳は、石室上部こそ破壊されているものの墳丘は良好に保たれていることが測量調査の結果明らかとなっていた。また、大元神社古墳の周辺には、高知最大の古墳である伏原大塚古墳がある（図3）。伏原大塚古墳は大形方墳であり、高知で唯一埴輪を持つ。また、おそらく特大型あるいは大型の横穴式石室を埋葬施設を持つ初期の古墳である。埴輪が導入された経緯は高知だけの事情では説明できず、他地域からの影響が存在したことを示唆する。また、伏原大塚古墳が方墳であること、蘇我氏の影響が強く認められる高知では重要な点であり、畿内との交流を考える必要がある。大元神社古墳は伏原大塚古墳の次世代の首長墓であると考えられるため、伏原大塚古墳で認められた他地域との関係が持続するのかどうかを明らかにすることは、南四国における地域間交流を研究する上で重要と考えられた。あるいは本古墳を調査することで地域間交流を示す新たな資料が得られることが期待された。以上のことから、科学研究費による調査対象として本古墳を選択したのである。

調査経過 調査は複数年で行う計画を立案し、関係各方面と調整を行った。初年度である今年度は墳丘の調査を、次年度は埋葬施設の調査を行う計画を立てた。調査は清家が担当し、作業には高知大学大学院人文社会研究科院生と同じく人文学部学生が参加した。参加者は例言に示したとおりである。

今年度の調査は、2006年8月16日から開始した。途中、天候に恵まれないこともあったが、墳丘に設けた3つのトレンチと古墳中央の壁面の調査を行い、9月7日に調査を無事終了することができた。

謝辞 調査を遂行するにあたり、遺跡ならびに合宿所周辺の皆様・関係諸機関には多大なご協力をいただきました。ご芳名を記して心よりお礼を申し上げます。

池英樹・甲藤栄一・黒岩崇・名本二六雄・野町貴弘・廣田佳久・藤岡敬一郎・森田尚宏・山本哲也・横部落の皆様・大元神社・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・香美市教育委員会・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・前行部落の皆様・八王子宮（個人、団体の順。五十音順。）
（清家）

注

- (1) 高知県の遺跡台帳は、高知県文化財団埋蔵文化財センターのホームページ(<http://kochi-bunkazaidan.or.jp/~maibun/>)で閲覧できる。

6 調査の経緯と経過

参考文献

- 高知県教育委員会編 1998『高知県遺跡地図』高知県埋蔵文化財調査報告書第43集、高知
高知大学考古学研究室編 2006『大元神社占墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第2冊 高知大学
人文学部考古学研究室、高知
廣田典夫 1979「考古篇」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知：pp. 37-154

第Ⅱ章 調査成果

1 墳丘の現状と調査区の設定

墳丘の現状 詳しくは測量調査報告書（高知大学編2006）をご覧いただきたいが、大元神社古墳は、丘陵の最高頂より北西にやや降ったところに位置する大元神社の社殿北側にある（図2）。墳丘の中心部は、石取り作業のためとされる掘削のため、大きく破壊されている（図8）。ここは長さ8m・幅4mにわたって大きく削り込まれてコ字状の崖面をなしている。この削平部の最奥部には、長さ1.8m・幅0.8mの石が露出しており、横穴式石室の奥壁があるいは天井石であろうと推定されている（図版1-（2））。また、墳丘の東側は、神社社殿に向かう通路を設置するためと思われるが、一部に削平が認められる。このように墳丘は多大な改変を受けているものの、墳丘西部と北半はおおむね墳丘の旧状を留めているようであった。墳丘北半の等高線をみれば円弧を描いているのであるが、西部の等高線は比較的直線状を呈していた。測量調査時の所見では円墳の可能性が高いと思われたが、墳丘西部の等高線の状況からその確定は墳丘規模とともに発掘調査に委ねるべきと考えられた（高知大学編2006）。

調査区の設定 先述の通り、当古墳の調査は複数年にわたって行う計画である。調査初年度である本年度は墳丘の規模と墳形の確認を主たる目的として調査を行い、2007年度は墳丘調査において不足する部分を調査しつつ、破壊されている埋葬施設部分の調査を行う計画である。そこで、本年度は、上記の目的を達成するために墳丘の西部・北部・東部に幅1mのトレンチを設定し、墳丘裾の確認を行うこととした。それぞれ順に1~3トレンチと命名している（図8）。また、墳丘中央の削平部分の壁面も精査して、墳丘築造にかかる盛土の堆積や埋葬施設に関する情報を収集することにした。当初はコ字状を呈する壁面すべてを精査する予定であったが、土量が意外に多くなることが判明したため削平部の南側壁面を観察するに留まった。つまりは、この壁面においては墳丘の東西断面を観察することになる。南側壁面のうち東側の壁面を崖面調査区東セクション、西側を崖面調査区西セクションと呼ぶ。

（清家）

2 墳丘の調査

1トレンチ 1トレンチは墳丘の西側に設置した長さ5m・幅1mの東西に長いトレンチである。墳丘中央部にある削平部が埋葬施設とほぼ同じ方向に掘削されているとすれば、その長軸方向に対してトレンチの長軸はほぼ直交する（図8）。

表土を掘削すると、盛土の流出土層と思われる土層が20~30cmの厚さで全面に堆積していた（図9-2~10層）。それを掘削するとトレンチの東半部において明黄褐色のきわめてしまった土（11層）を検出した。2~4層よりも土が均質でしまりが良く汚れがないことから墳丘盛土

8 墳丘の調査

と判断した。ただ、11層の直上に堆積していた4層は、後述する崖面調査区西セクションの13層（図13）と類似していたので、これも盛土の可能性はある。ただ、4層は崖面調査区西セクション13層の土に比べるとしまりが悪かったので、盛土が流出した層であると判断した。トレーニチの西半では盛土を検出することはできず流土層直下から地山面を検出した。11層はトレ



図8 調査区配置図

チの東端から西へ1.9mまでの範囲で検出されたが、11層が途切れた箇所からさらに30cm西の地点、つまりトレンチ東端から2.2mの地点で地山が崖状に落ち込む箇所を検出した。この地山の崖面の西側には幅50cm・標高63.1~63.2mの平坦面が観察されている。この平坦面西側では地山面が再び緩やかに降っていき、墳丘西側の崖に続いていく様子が認められた。

当調査区で観察された地山は、崖状の落ち込み部以外は緩やかな傾斜を保っている。そのような状況から考えると、地山面が崖状に落ち込む箇所は、自然地形とは考えがたい。その西側に平坦面が存在することも不自然である。墳丘の裾部を画するために地山を削り出したものと理解する事が適当な解釈であると思われる。

なお、この調査区からは出土遺物は全く出土しなかった。

2 トレンチ 墳丘の北側に設けた長さ7.5m・幅1mのトレンチである。表土層とその直下の盛土流土層（図10-2・3・6~8層）を掘削すると調査区の南端から80cm北までのところでは古墳盛土（図10-4・5層）を検出し、それより北では地山を検出した。墳丘の北半は地山を削り出し、上部のみが盛土で構成されているものと思われる。

トレンチのほぼ中央部からトレンチを横断する幅約50cm・深さ約25cmの溝が検出された。この溝の北側には幅約50cmの平坦面が検出された。平坦面の標高は63.6~63.7mである。平坦面

1. 7.5YR2/2黒褐色細粒粘土
2. 10YR4/6褐色細粒粘土(中纖1%)
3. 10YR4/6褐色細粒粘土(中纖1%)
4. 7.5YR5/6明褐色細粒粘土(中纖7%大纖1%)
5. 7.5YR5/3にぶい褐色細粒粘土(10YR7/3にぶい褐色細粒粘土40%)
6. 10YR8/4浅黄色細粒粘土(7.5YR8/1灰白色土15%)
7. 7.5YR4/4褐色細粒砂(7.5YR8/3浅黄色土15%)
8. 7.5YR6/8褐色細粒砂(10YR7/6明褐色土7%)
9. 10YR4/4黄褐色細砂
10. 5YR5/8明赤褐色粗砂(5YR7/4にぶい橙色土10%)
11. 7.5YR5/6明褐色細粒粘土(中纖1%)

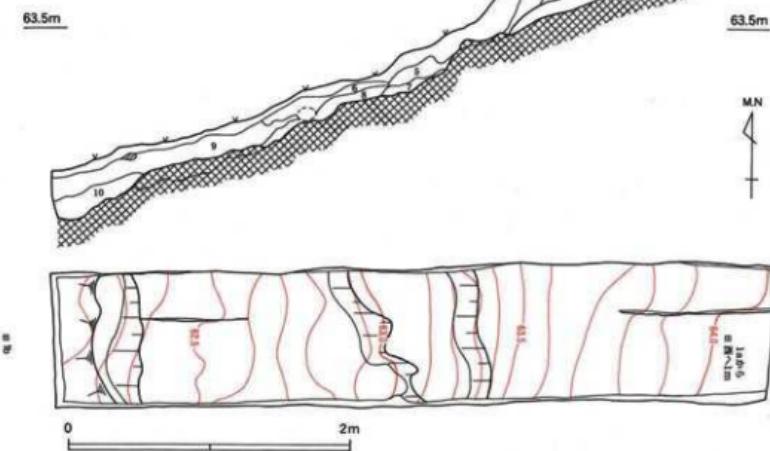


図9 1トレンチ平面図・土層断面図

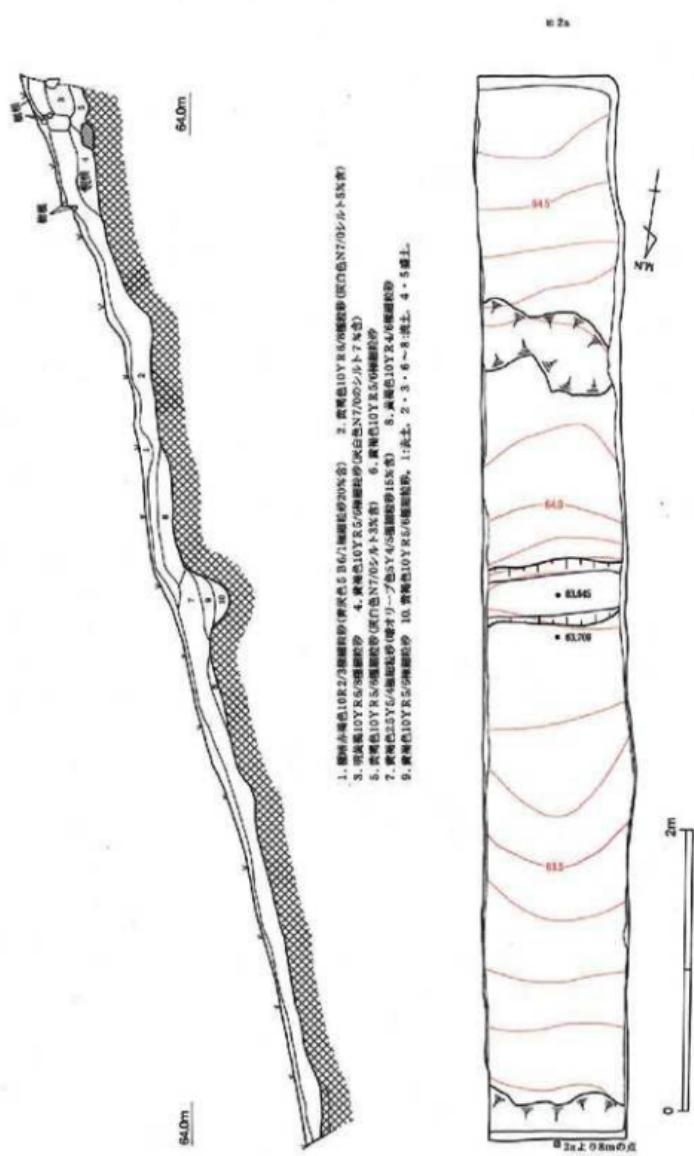


図10-2 トレンチ平面図・土壌断面図

のさらに北側は緩やかに丘陵裾へ向かって降っていく。このトレンチ中央部で検出された溝からは、古墳と関連する遺物は何も出土しなかつたが、後世の遺物も出土していない。また、トレンチの周辺の現地表を観察すると、溝と平坦面が検出されたトレンチ中央部付近の地形は、平坦面が東西に続いており明らかな傾斜変換点となっている。トレンチの東側では、この傾斜変換点は3トレンチに行く途中で不明瞭となるが、傾斜変換点を西に追っていくと、1トレンチで観察された地山の落ち込みに続く。2トレンチで検出された溝と平坦面は墳丘を画する施設であって、少なくとも平坦面は1トレンチと後述する3トレンチまで巡っていたと考えられる。溝は3トレンチでは確認されたものの、1トレンチでは検出されていないので、古墳を全周せずに丘陵の北から東半までを区画していたものと現時点では考えられる。このトレンチからは遺物は全く出土しなかつた。

3トレンチ 墳丘の東側に設置した長さ3.8m・幅1mの東西に長いトレンチである。墳丘の東側は、丘陵裾から神社社殿へ向かう裏道が通っているためか、墳丘が部分的に削平され平坦な地形を呈している。この平坦面にトレンチを設置した。トレンチの中央やや東よりのところでは、先述した裏道を設置するための段差がトレンチにかかっている。

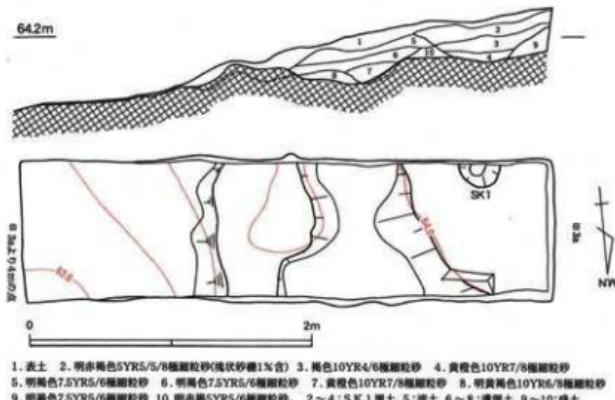


図12 3トレンチ平面図・土層断面図

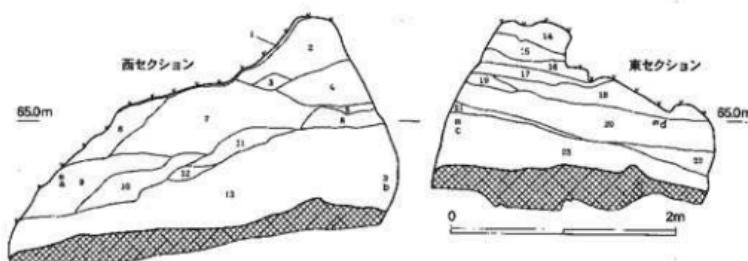


図11 3トレンチSK1検出状況

表土を除去するとトレンチ北端で不整円形の土坑SK1が検出された。SK1は、トレンチ外に広がるので規模等は不明であるが、深さは20cm程度である。SK1からは、一辺40cm弱・厚さ約15cmの平石が2個と拳大の礫が複数検出されたが、他に出土遺物はなく性格不明である(図11)。表土直下から掘削されていること、埋土が汚れていることとあわせ、トレンチのある地点は墳丘が削平されて平坦地となっているところであるので、後世の掘削である可能性が高い。SK1の上面と写真撮影を行った後、さらに掘削を続けたところSK1の東側、トレンチ西端から1mの地点で幅約70cm・深さ約20cmの溝が検出された。溝の上端の標高は約64.0mである。この溝のさらに東側には幅50cm以上の平坦面が観察されている。この平坦面の東側は、先述した裏道のため、地山まで削平を被っている。溝は5層下(図12)から掘削され、SK1より層位的に古いことが壁面から確認されている。溝の規模ならびに墳丘から見て溝の外側に平坦面が存在する状況は、2トレンチで検出された溝と類似する。出土遺物はなかったものの、墳丘を画する溝の可能性が高い。溝の標高は、1トレンチにおける平坦面と2トレンチの溝の標高よりも高いが、後述するように古墳が存する地点は東側がやや高いという旧地形が復元される。その地形に起因して東側の古墳裾部が高くなつたのであろう。

崖面調査区 崖面調査区西セクションを精査したところ、標高63.9~64.3mで岩盤が検出されている。これが地山である。地山は西に低く東側にやや高くなる。表土と地山の岩盤の間には盛土が観察されている。盛土は西セクションの東端近くで1.6m程度の厚さがある。墳丘裾部は標高63.2~64.0m付近を通ると推測されるので、崖面調査区付近の墳丘は、その多くが盛上で構成されていることになる⁽¹⁾。西セクションを観察すると、岩盤の上にまず大きな単位の盛土(図13-13層)を積み、その後やや小さめのレンズ状の盛土(図13-8~11層)を標高約64.7~64.9m付近まで積む。この時点で墳丘盛土を一度平坦にしようとした意図が感じられる。さらその上に大きな単位の盛土を積む。2~5層は、後世の掘り込みの堆土のようにも理解ができる。6層以下の盛土が固くしまりがあるのに対し、2~5層はしまりが悪い。5層は炭化物が多く含まれ、その炭化物は新鮮な感じがあったので、後世の掘り込み埋土である想定を裏付けるのだが、6層以下とは性格の異なる古墳盛土である可能性もある。この2~5層の性格を明らかにするべく、この西セクションに連続するコ字状攪乱の西面も一部精査を行つたが、掘削の立ち上がりが確認されなかつた。立ち上がりが確認されなかつたので、古墳盛土である可能性もある。コ字状攪乱の精査は次年度に本格的に行うこととしたので、2~5層の性格の解明は次回の報告に記したいと思う。

崖面調査区東セクションでは、標高64.40~64.65mで岩盤の地山が観察された。地山は西が高く、東へゆるやかに下降する。東側で確認された地山は西セクションよりもやや標高が高い。西セクションから東側へ向かって地山は高くなつてゐたのであり、削平された箇所つまり石室があつた箇所が地山の最も高い地点であったのであろう。そしてその最高部から東へ緩やかに



1. 素土 2. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 (2.5YR8/2灰白シルト5%、灰3cm前後の礫少量) 3. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 (2.5YR8/2灰白シルト12%)
4. 7.5YR5/8明褐色細粒砂 (10YR8/3浅黄シルト10%) 5. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 CNL5/6風化物40%、10YR8/3浅黄シルト10%
6. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 (1cm前後の礫5%) 7. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 (7.5YR8/3浅黄シルト20%) 8. 5YR5/8明褐色細粒砂 (中粒砂、粗礫少量)
9. 7.5YR6/8暗褐色細粒砂 (底質に10YR8/1灰白シルト2%) 10. 5YR6/7明赤褐色細粒砂 (底質に7.5YR8/1灰白シルト15%)
11. 10YR8/4Cに5~7mm黄褐色細粒砂 (10YR7/2黄シルト2%、僅3mm前後の礫少量) 12. 2.5Y7/3浅黄褐色細粒砂 (粗礫少) 13. 7.5YR4/4褐色細粒砂 (底質3cm灰20%) 14. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 (7.5YR8/1灰白シルト5%) 15. 5YR5/8明褐色細粒砂 (7.5YR8/2灰白シルト2%)
16. 5YR6/8暗褐色細粒砂 17. 5YR8/2灰褐色シルト (2.5YR8/3明赤褐色細粒砂20%) 18. 2.5YR5/8素赤褐色シルト (5YR8/2灰白シルト2%) 19. 5YR5/6明褐色細粒砂 (5YR8/2灰白シルト5%) 20. 5YR5/6明褐色細粒砂 (5YR8/2灰白シルト30%)
21. 5YR8/8明赤褐色細粒砂 (5YR8/3灰白シルト7%) 22. 5YR7/6明褐色細粒砂 (7.5YR8/2灰白シルト30%) 23. 5YR7/6褐色細粒砂 (7.5YR8/1灰白シルト30%) 2~22. 灰土

図13 崩面調査区土層図

地山は降っていたのだと考えられる。地山の上に西セクションの13層に対応する23層という厚めの盛土をまず施している。その上は西セクションとは異なり、やや薄い盛土を幾層も傾斜面に流すように施している。いずれの盛土も固くしまりがある。東セクションと西セクションでは盛土の施し方が異なる点は興味深い。また、西セクションのように盛土を施す途中で平坦面を形作ろうとした形跡は明瞭には見いだしがたい。その可能性があるとすれば22~23層上面がその候補となろう。この点についても次回の調査で明らかにしたいと考える。

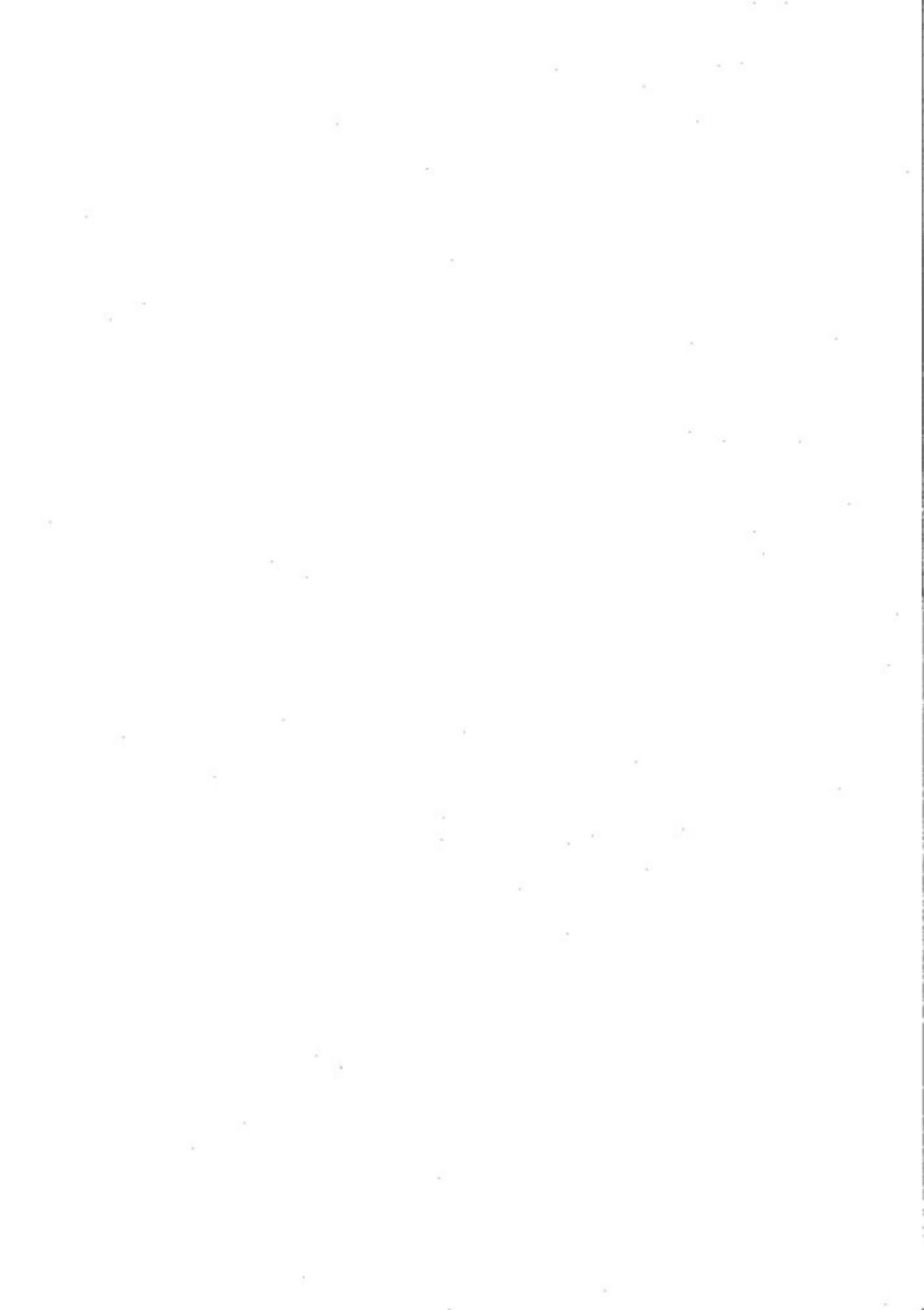
(清家)

注

- (1) ただし、2トレンチ南端では標高64.6mで地山を確認しているので、古墳全体が盛土で築造されているわけではないようだ。崩面調査区はむしろ石室の前面、つまりは古墳の前面に位置しているので、この部分は盛土が多く使用されたと言うことである。

参考文献

高知大学考古学研究室編 2006『大元神社古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第2冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知



第三章 まとめ

墳丘に3箇所のトレンチを設定し、そのいずれからも墳丘の裾部に相当する溝あるいは地山の落ち込みを確認することができた。裾部と考えられる遺構の標高は約63.2~64.0mであり、この高さの等高線をみれば、円弧を描いている箇所が多いことから円墳の可能性がある。さらに、これらの遺構を通る円を描くと直径約18mの円墳が復元できる（図14）。また、崖面調査区の精査からは墳丘南部の大部分が盛り土で形成されていることも判明している。残念ながら遺物が出土しなかったため、細かな時期を確定することはできなかった。

しかし、墳丘規模と墳形を想定する材料を得たことは大きな成果であった。直径18mという墳丘は全国的に見れば小規模だが、土佐においては侮るべき存在ではない。筆者は横穴式石室の規模から土佐における大型古墳を抽出する作業を行ったことがある（清家2007）が、大型石室を持つ古墳の墳丘は直径あるいは一辺が15m以上であった。したがって、大元神社古墳は古墳時代後期の土佐においては大型古墳に相当、あるいは準じる規模の古墳といえるのだ。

また、大元神社古墳は、土佐最大級の方墳である伏原大塚古墳の1km西に位置する。伏原大塚古墳は土佐で唯一埴輪を持ち、金銅装馬具を副葬品として有するなどTK43段階では高知平野を代表する盟主的墳墓である。大元神社古墳の時期が決めがたいので明確には言えないが、当古墳出土とされる予岳寺保管の土器（岡本1968：p. 566）は伏原大塚古墳よりも時期的にやや遅れる可能性が高い。つまり、墳丘規模が直径18mと判明したことで大元神社古墳は伏原大塚古墳の次世代の首長墓として名乗りを上げたのである。

ただ、土佐山田は土佐でも有数の古墳分布地帯であるだけに、新改横走古墳や須江ツカアナ古墳などの規模の大きい古墳があることも忘れてはならないであろう。これらの古墳との関係を今後整理し、当地での首長間関係を問うていく必要がある。今後の検討課題としたい。こうした課題を解明するためにも、大元神社古墳の内容をさらに明らかにする必要があろう。次年度以降は墳丘調査をさらに進め、さらには破壊された埋葬施設について



図14 墳丘復元図

も調査を進めていきたいと考えている。

(清家)

参考文献

岡本健児 1968『高知県史考古編』高知県、高知

清家 幸 2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真楊社、

京都：pp. 447-464

図 版



(1) 古墳の立地



(2) 古墳中央部



図 一ノ入井 (壁面)



図 一ノ入井 (壁面)



(1) ニンニ入木 (岸谷山)



(2) ニンニ入木 (猪名山)



(1) モルダバイト (原石)



(2) モルダバイト自然 (原石)



(3) モルダバイト自然 (原石)



(1) 崖面調査区西セクション



(2) 崖面調査区西東セクション

【報告書抄録】

ふりがな	おおもとじんじやこふんはくつちょうさほうこくしょ				
書名	大元神社古墳発掘調査報告書				
副書名					
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告				
シリーズ番号	第4冊				
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室(編著:清家 章)				
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室				
所在地	高知市曙町2-5-1				
所収遺跡名	所在地			コード	
				市町村	遺跡番号
大元神社古墳	香美市土佐山田町楠目小学前行大元			323	
北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
35° 36' 49"	133° 41' 46"	060816~060907	約24m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大元神社古墳	古墳	古墳時代	周溝		

大元神社古墳発掘調査報告書

-高知大学考古学調査研究報告第4冊-

2007年3月発行

編集
発行 高知大学人文学部考古学研究室
〒780-8520 高知市曙町2-5-1

印刷 有限会社 西村謹写堂